

居住区同士をつなぐ通路の左右。シートの上に並べられているのは、どれも使いふるされた、シケた品ばかりだった。

半分以上の発光パネルが切れちまつてる上に、残りの半分も消えかかっているもんだから辺りは大層薄暗い。剥き出しのステンレスに囲まれた、いかにも古くさい宇宙ステーションの一角といった感じの場所だ。貨物車両が二台すれ違えるかどうかの幅しかない。ここでは何もかもがすっかりどす黒く変色しちまつてる。居並ぶ奴らも、通り過ぎてゆく奴らも。

もつとも、薄暗いからまだ商売になっているのかもしれない。日の下にさらされたなら、たちまち盗品であることが露見しそうなデバイスばかりだった。

筐体の一部がめくれ上がっている旧式のエアプレッシャー、液漏れの著しい変圧器、赤錆の浮き上がった何かのフレーム、ボロボロにひび割れたパワードスーツの頭部、安っぽいプラスチックケースの中に無造作に放り込まれている数十枚の電子基板はべつとりとした分厚い油と埃にまみれたままだ。どれもご丁寧にシリアルナンバーがつぶされ

るか削り取られるかしている。実に不自然。

その他、ディスプレイがなくなっちまってるセンサー類やら、太さがまちまちなケーブル類やら、よくもまあ、こんなジャンク以下のガラクタばかりを集めたもんだ。手に取る気にもなれやしない。

ケツ、と辺りを見渡す。

どいつもこいつも、貧乏臭そうな奴らばかりだ。

あーあ、とため息がこぼれた。

「やっぱり無駄足だったか。ま、こんなところじゃ無理もねえが。まったく、もうちっとマシなステーションはねえのかよ……と言っても無駄か。こんなド田舎じゃな」

俺は今、水星にいる。正確には水星の衛星軌道上に浮かぶ宇宙ステーションの中だ。

火星が縄張りの俺がこんなところにいるのにはもちろん訳がある。貧乏、というひどく情けない訳が。

俺の愛船、ラグタイム・ウルフ号の修理には案の定、結構な金がかかった。船体の方はどうにかなったんだが、残念なことにメイン・ウエポンである大出力陽電子砲が今はない。あれはそもそも正規のルートからでは入手することのできない逸品で、欲しかったら裏から手を回すしかないんだが、それでもそうそう簡単に手に入るようなシロモノ

じゃないんだ。レアなアイテムってわけ。おかげで地下オークションでは馬鹿みたいな値がついちまってる。

だがしかし、いざって時に己の命を預けることになるのが武器だ。納得のいかないものでお茶を濁すわけにはいかない。ここにだけはこだわらなくちゃな。

まあ、そんなわけで俺には今、とにかく金が必要なんだ。で、こんな星まで貨物を運搬してきたってわけ。今は帰りの荷が届くのを待っている途中だ。もちろん運んでいるのはやばいブツなんかじゃないぜ。ごく普通の一般貨物だ。正直、こんなもんを運んだところで大した金にはならないが、残念ながら今のウルフは丸腰同然でね。荒っぽい任務はこなせない。何しろ低出力の安物レーザー砲が一門と、小型ミサイルが三発きりつてんだからな。これじゃ宇宙海賊どもとまともにやり合うのは無理つてもんだ。レーザーで威嚇してミサイルで足止めの時間稼ぎ、その間に全力でずらかる。情けないが、今のウルフにはこれで精一杯。

幸い、往路では海賊どもには出くわさなかった。ま、復路でも会うことはないだろ。連中が目の色を変えるような品は運んじやいないんだからな。

昔は惑星間の輸送にもマス・ドライバー（資源運搬用カタパルトのこと。要するに衛星軌道上に浮かぶりニアモーター・カタパルトを使って運びたい貨物を大砲の砲弾のよ

うに撃ち出すのさ)が使われていたんだが、今時そんなことをすれば、もちろん送り出したコンテナは全部、途中で海賊やらスカベンジャーやらに美味しく頂かれちゃう。この宇宙には貧乏人やら無法者やらがそこら中にいるからな。

で、俺のような奴が雇われる、というわけだ。

だがまあしかし、水星圏てのはいつきてもシケてやがる。華やかさってもんが一欠片もありやしねえ。何しろ太陽エネルギーの中継器と採鉱ステーションくらいしかない、貧乏な惑星だからな。

昔は太陽に関する研究施設等も数多くあったらしい。ダイソン・リング(と俺たちは呼んでいるが、正式名称は太陽光発電用円環構造体と言う)の小型試作品なんかを造ったりと、一時期はそれなりに羽振りも良かったそうなんだが、今ではその手の太陽研究用施設のほとんどはアテンやフーヴァーマン・ガイシエッカーといった太陽周辺の居住区ヘビタクトや、ヴァルカノイド(太陽と水星の間に存在する小惑星群のこと)に移っていて、水星にはほとんど残っていないという話だ。

ロクな産業がないので住人も少ない。経済活動は総じて低調だ。当然、活気もない。あの輝かしい太陽に最も近い惑星だつてのに、掃き溜めみたいな星になっちまってる。今じゃ影ばかりが濃い、といった塩梅さ。

だがここを掃き溜めと呼ぶのなら、あの船はまさに舞い降りた鶴だったよなあ、と俺は通路を歩きながらは独りごちる。いや、宇宙港でウルフの隣に駐機していた宇宙船の話さ。

あんな綺麗な船を見たのは久しぶりだったぜ。百メートルクラスの超高速クルーズ船。大金持ちが太陽系一周旅行なんかをする時に使う奴だ。真上からだど鋭い鎌のように見える。その流線型の優雅なカーブときたら、見ているだけでもため息が出るほどだ。実にそそられたね。鏡面仕上げの施された銀色の機体には染み一つなかった。後部からは熱核反応エンジンの大型ノズルが五つも覗いてた。恐ろしく速い船、ということだ。全力を出したら軍の高速偵察艇でも追いつけないに違いない。無駄を徹底的にそぎ落としその機能美は、ほとんど威嚇的ですからあるほどだった。あんな型の船は俺のデータベースにはないから、恐らく職人どもに特注して造らせた一点物の船なんだろう。とんでもなく金がかかっているんだろうな、きっと。

おかげで、その隣に泊まっている俺の船の貧相なことといったら。泣けてくるほどだったよ。まさに貴婦人とドブネズミだ。やれやれ。リラがいなくて良かった。

俺の相棒、リラ・ホーリームーンという名のインフォモーフは火星に残してきた。こんなちんけなヤマなら俺一人で十分だし、あいつも今は短期のアルバイト中で、火星の

宇宙ステーションで働いているんだ。そろそろ義体キョウタイでも買う気になったのかね？ ま、いつか冒険に出ようってんなら、金はいくらあつたって困らないしな。それと、俺の留守中に大出力陽電子砲の出品があつた時のための要員として、というのもある。地下マーカーでも滅多に出回らないブツだ。見かけたら速攻で押さえておく必要がある。借金を掻き集めれば、ま、頭金くらいは何とかなるだろう。

積み荷が届くまでの間、暇つぶしにウインドウショッピングと洒落込むか、と少しばかり足を伸ばしてみたんだが、そもそもこの貧乏宇宙ステーションのマーケットにはウインドウなどという気の利いたものはないのだった。がっかりだ。剥き出しのバルク品が路上に並べられているだけとはね。しかもどれもこれも古いつたらない。

「ま、4D光子グラフィックメモリなんてシロモノが、そもそも水星圏なんぞにあるわけもねえか」

周囲を見渡して俺は肩をすくめる。

リラの奴が以前から、電腦ユニットのメモリをもっと高速なものに換えてくれ、とうるさいんだ。「あたしの性能が上がれば、この船全体の性能も上がるのよ！」とききたもんだ。

もちろん俺にはパートナーを甘やかす趣味なんざない。最先端のメモリチップなんか

買わないさ。金もないしな。ただ、相場を見ておくくらいならいいかな、とまあ、そう思っただけだ。丁度暇だったしね。

しっかし、まあ、予想してたこととはいえ、ここにあるのは最先端という言葉からは縁遠い品物ばかりだ。ま、事情はよく分かるよ。水星は太陽が容赦なく照りつける過酷な環境だ。こういう世界ではスペックよりも耐久性が重視される。多少性能が劣っても、頑丈な製品の方が良いのさ。

無駄足だったなあ、とつぶやく。

4 D光子グラフィックメモリなら火星でも買える。だが、ちよつとばかり高価でね。火星では品薄のチップなのさ。

「金星でなら安く手に入れられそうだが、そんな遠回りしてたんじゃ水素代が大変なことになっちまうしな」

積み荷だつて届けなくちゃならないんだ。たかだかメモリチップのために寄り道なんてしてられない。ま、リラにはまだまだ当分の間は低速のメモリで我慢してもらわないといけないな。

さて、船に帰るか、と踵を返そうとした時、銃声が辺りに轟いた。

とつさに腰をかがめて身構える。とはいえ音はだいぶ遠い。この通路ではないようだ。

数ブロック先の、隣か、隣の隣の通路だろう。

このステーションでは武器の携帯は許可されていないはずなんだが、もちろん、そんなもんは隠そうと思えばどこにだって隠せる。そして港に喧嘩はつきものだ。

実際、この辺りの連中にとつて発砲沙汰などは日常茶飯事であるらしい。もう慣れっこになってしまっていると見えて、頭を抱えてうずくまっていた数名は、すぐに立ち直つて、何事もなかったかのように歩き始めた。

俺も腰を伸ばす。俺以外に向けられた銃口なら、俺には関係ない。触らぬ神に祟りなし、だ。

今来た道を引き返し始めた。

あつちにこつちにと道草を食いながら、露天商（宇宙ステーションの中に雨は降らないのだから確かに露天で十分だな）ばかりの市場を後にし、宇宙港へと続くエレベーターへと向かう。

タッチパネルを操作すると、ガラス張りのチューブの中をガタゴトという音を立てながらぼろっちいケージが上がってきた。

乗り込む。

先客がいたが俺はさして気にも留めず、ガラスの外の風景を眺めていた。ガラス張りにした理由のよく分からない、貧相な景観を。

だが先方は俺に興味があったらしい。わざわざ俺の視界の中に入ってきた。被っていた黒いフードを外すと、女だ。それもなかなかの美人だった。

ややつり上がった切れ長の目はキツイ印象だが、氷のように冴えた青い瞳にはよく似合っている。肉厚の唇も、すうっと通った鼻筋も、形は悪くない。やや頬がこけてはいるが、それすらも大人っぽさの演出に一役買っていた。健康的な褐色の肌。艶やかなロングの赤毛。それを無造作に後ろでひっくくっているワイルドなところや、ちよつと大柄なところなんかもバツチリ、俺の好みだった。

そんな美女が悪戯っぽい視線で俺のことを真っ直ぐのぞき込んできてるんだから、生身だった頃の俺なら口笛の一つも吹いているシチュエーションではある。

「あなた、船乗りね」と彼女はささやいた。

赤と銀色の簡易型スペーススーツの上からフード付きの黒いマントを羽織っている。身なりにはいささかの古びた感もない。この洗練された出で立ち。どう考えても水星圏の住人のそれじゃない。旅行者だろうか。

何も言わないでいると、彼女は「簡単な推理よ」と笑った。

「鉱山労働者なら、とつくに星に降りてる。企業の間人なら、そもそもこんな貧相なエリアにいるわけがない。ステーションの地元民にしてはやけに小綺麗」

俺のアーマールの表面を人差し指で軽くなぞった。

なるほどね、と俺も笑う。

「こんなナリでも水星じゃそれなりの紳士に見えるってわけだ。確かにあそこまでのガラタ趣味は俺にはないな」

ガラスの外を指さす。

このステーションにも機械人は多い。が、どいつもこいつもひでえ身なりだった。この星では赤錆やら黒カビやらをまとうのが流行ってるのかと勘違いしてしまいそうになる。

ま、もつとも、と俺は話を続けた。

「そもそもこのエレベータは宇宙港行きなわけだがね」

フフ、そうね、と彼女。

「本当のことを言うと、あなたの噂を聞いたのよ」

へえ、と俺。

「けど俺はどこにでもいる貨物運搬船の船長で、女ホームズ氏の目に留まるようなことは何もしちゃいないんだけどな。運んでいるのも色気のない積み荷ばかりでね、業務用マシンのパーツとか、人工衛星用の推進剤とか。生憎だが、あんたみたいな美人に横流しできそうな品は何もない。今度からはルージュの一本も積んでおくことにするよ」

と俺はおどけて見せたが、彼女は何も言わずに微笑んでいる。何を考えているのか分からない、アルカイツク・スマイルって奴だ。眺めとしては悪くないが、俺はいささか居心地が悪い。何しろ向こうはこつちを知っているらしいが、俺はこの女のことを何も知らないんだ。

で、と催促。

「俺に何か用かい？」

美女がゆっくりと口を開いた。

「仕事を頼みたいのよ、ジョニイ・スパイス船長。荒事になりそうなの」

宇宙港の待合ロビーの一角、巨大な観葉植物の陰で美人と立ち話、とくれば男なら誰だってロマンチックな想像をしそうなもんだが、残念ながら俺たちがしたのはビジネス

の話だ。それも冗談みたいな。

ジェステイ・K・マクビーと名乗った彼女の口から出たのは、ファイアウォール、という単語だった。

知ってる？、と彼女。

知らないでか、と俺。

「知らない人間を探す方が難しいだろうぜ。何しろ太陽系でもっとも有名な都市伝説の中の一つだ。俺の相棒なんざ、毎日のようにメッシュを検索してはファイアー、ファイアー言ってるよ。ファンなんだ、あの組織の」

ファイアウォール、考えるだけでも憂鬱になるね。こいつは最も有名であると同時に、最も複雑な謎に包まれている組織だ。そもそもその目的からして諸説ある。一般的にはトランスヒューマンを社会の陰から保護し続けている正義の秘密組織ってことになっているが、やっていることは必ずしも正義とは限らないなんて噂もある。その全貌を理解している者は、もしかしたら太陽系には一人もいないのかもしれない。まあとにかく、ファイアウォールに関する情報は全て噂にすぎず、その内容は憶測の域を出ない。

最も一般的などころとしては、とにかく人類の危機が発生すると奴らは現れ、その危機を取り除いて去ってゆく、というもの。現れると言っても、多くの場合、その規模は

せいぜいが数人程度。そのたった数人のエージェントどもも、一人一人は大したことを知らない。彼らはただ上の命令に従っているだけのアルバイトやボランティアみたいなの連中なのだ。だからたとえ捕まえて締め上げたとしても、本当のところは何も分からない。もつとも、実際のファイアウォールのエージェントは少数精鋭、優秀な奴らばかりと相場は決まっているから、捕まえて締め上げるのだってそう楽ではないはずだがね。ま、とにかく、正義の味方と言われているわりには、それに似つかわしくない徹底した秘密主義に貫かれている、ってことだけは言えるだろうな。

そんなわけなんで、ファイアウォールに関しては「謎の組織」ということ以外はほとんど何も分かっていないんだ。

もちろん、噂では、だが。

「あなたはどうかなの、船長？ その様子じゃ信じていないみたいね」

俺は片手を挙げる。

「よしてくれ、もう夢見る年頃はとくにすぎてる。人類を人知れず守り続ける裏の組織？ ヘッ。よくあるおとぎ話だよ。いかにもティーンの好きそうなお膳立てじゃないか。馬鹿馬鹿しい。大人はそこまで暇じゃないぜ」

肩をすくめる。

彼女は少し困ったような表情を浮かべた。美人が浮かべるとどんな表情でも美しいね。「ではこういうことにおきましょ。とにかくあたしはある組織のエージェントの一人です」

「ついさっきドジを踏んだばかりなの、だろ？」

俺が会話の先回りをしてやると、彼女はますます困ったように微笑んだ。ああ、何て魅力的なんだ。思わずもつと色んな表情を引き出してしまいたくなる。まったく、リラの奴もこれくらい色っぽかったら良かったのに。

「あなたの淑女へのいたわりの心は、まだ十分とは言えないわね、船長」

「よく指摘されるよ。やっぱりか。あの銃声騒ぎの原因はあんただだったってわけだ」

これこそ簡単な推理だ。何のトラブルも抱えていない人間が、わざわざ俺なんかに接触してくるわけがない。

ジェステイは腕組みをすると、ふう、と小さく息を吐いた。

「実際のところ、厄介なミッションなのよ。よくここまでこれたものだと思っても思うわ。けれどそろそろ手詰まり。こんなちんけなステーションの中では身動きが取れないでしょ。このままでは敵の手に落ちるのも時間の問題ってわけ。焦ってたのよ。本当ならもう少し慎重に情報屋とも接触したかったんだけど。でも無駄ではなかったわ。こう

してあなたに出会えているのだから」

「どんな噂をいくらで買ったのかは知らないが、俺は火星の犯罪者ギルドの中ではせいぜい二流ってところだぜ。ケチな運び屋さ。お姫様のナイト役にはちっとばかり役者が不足してると思うがね」

「依頼したいのはまさにその、運び、なの」

「ほう」

「運んでもらいたいのはこの私。それと」

簡易型スペーススーツの襟の中から小さなペンダントを引っ張り出す。

「このカプセル」

「何だい、そりゃ？」

銀色の鎖の先には、確かに小さな金属製の気密容器が吊されていた。

「Xーリスク、とだけ言っておくわ」

Xーリスクというのは人類を絶滅させかねない危険のことだ。やれやれ、ファイアウォールの次はXーリスクとききたか。ま、この二つはセットみたいなもんだからな。自然ではある。

「まさか、ウイルスの類いか」



「かもね。詳しいことは私も知らない。とにかくこれが開いたら人類は滅びかねない、ということだけは確か。私の役目はこのカプセルを金星の同志に届けること」

「おいおい、随分と物騒な話だな」

「安全な品なら、わざわざあなたを探したりはしないわ。正規の郵送手続きを踏めばいいんだもの。でしょ？」

そりやそうだ。裏稼業の運び屋が絡む以上、積み荷はろくでもない物に決まっているさ、もちろん。だがさすがにXーリスクとなると、俺だって怖じ気づきたくもなるぜ。機械人に感染するウイルスだってあるんだからな。積み荷としては最低最悪だろう。たとえ美人と一緒にあったとしても。

「そいつを巡って一悶着、というわけか。……敵どもの正体は？」
彼女がかぶりを振る。

「皆目。組織は私たちに必要最低限の情報しかくれないし、どのみちXーリスクということなら欲しがる奴はそこら中にいる。これ一つでどんな政府だろうと脅きたい放題。内容次第では兵器にだって転用できるんだもの」

それもそうか、と俺も納得。ハイリスクの裏には、ハイリターンが隠れているものだ。Xーリスクに富の匂いを嗅ぐ奴がいたって何も不思議なことはない。

とはいえ、自分がそこに関わるとなったらそう肯いてばかりもいられないだろう。何しろ周りは全部敵つてことだ。何の準備もなしにそんなへヴィな争いに巻き込まれるなんて、どう考えても感心しないぜ。

……それにどうも彼女の話には引っかかる部分があるのだ。

できればこの仕事、受けたくない、な。

俺は腕組みをして考え込んだフリをした後、重々しく口を開いた。

「問題が幾つかあるな。まず俺の行き先は金星じゃない。火星だ。帰りの積み荷だって既に決まってる」

「でもあなたは金星に飛ぶわ。だって火星まで鉱物を運ぶ仕事なんて、誰にだってできるもの」

「簡単に言ってくれるがね、お嬢さん」

「ジェスト、でいい」

「今日びの物流じゃ、海賊対策が欠かせないんだぜ、ジェスト。自動操縦のロボット船じゃ、ポテト一つ運べやしない」

「私とこのカプセルを金星に届ける方が何万倍も難しいわよ」

「違約金を払わなくちゃならないんだ」

「もちろん、必要経費はこちらで全て持つわ。その上で報酬は三倍出す。しかもその半額を前払いするってのでどう？ 私の所属している組織、気前だけはいいいんだから。それともケチ臭いクライアントの方がお好み？」

くっ。金のことを言われるとこちらも弱い。

大出力陽電子砲。全ては大出力陽電子砲のため。俺には金が要るんだ。三倍ってことなら、確かに話としては悪くないが……。

「火星に飛ぶはずだった船が急遽、行き先を金星に変更するんだ。目立たないはずがない。どんな馬鹿だって気づくだろうぜ」

「難易度が一つ上がるというわけね。ンッフ、ぞくぞくしちゃう」

獲物を見つけた狐みたいに目を細めている。この女、危ない奴かも。

おいおい、と俺。リスクを喜ぶなんて、まともじゃないぞ。

「色々と事情が重なってましてね、俺の船は現在、ロクな武装をしていないんだ」

「それは全然問題ないわ。ドンパチをやるつもりはないもの。金星まで逃げ切れればそれでいいのよ」

「ところがどっこい、俺の船は足が遅い」

「貨物船に過度な期待はしてないってば。その点も大丈夫。ちゃんと考えてあるんだか

ら」

「コールドスリープや生命維持のための装置だつて積んでないんだ。生身の人間が乗れるような仕様にはなつてない。改修には少々時間が」

「大丈夫よ。ちゃんと宇宙服を着込んでいくから」

「おいおい、金星までどれだけかかると思つてんだ。しかもあの星は今、太陽の向こう側にある」

「その点も好都合。エゴキャストで追つてこられる心配をしなくてもすむものね。通信用の中継衛星程度ではさすがにエゴデータの転送はできないわ」

あいな、と俺。

「えっちらおっちらと太陽を回つていかなくちやならないんだ。その間ずっと宇宙服を着ているつもりなのか？」

「そうよ」

無茶な。俺は天を仰ぐ。金星までウルフの足ではどんなに早くても一週間はかかる。その間、ずっと同じ服で過ごすのか？ 宇宙服を着たままじゃ、尻も搔けないんだぜ。

「さて次は？ 問題はもう出きったのかしら？ じゃあ次は私の番ね。さっそく行きましょ」

「行くって、どこへ？」

「い、い、と、こ、ろ♪ きつとあなたも気に入ると思うわ、船長」

悪戯っぽく微笑む。

なぜだろう、ジェストの笑顔を俺はあまり魅力的に思えなくなってきた。胸の中に嫌な予感が湧き上がってくるのだ、それはもう叢雲のような勢いで。

(つづく)



Eclipse Phase は、Posthuman Studios LLC の登録商標です。本作品はクリエイティブ・コモンズ『表示 - 非営利 - 継承 3.0 Unported』ライセンスのもとで作成されています。ライセンスの詳細については、以下をご覧ください。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/3.0/>